

静かに生きる

まだ肌寒い日もある
梅雨時の土曜日に

銀座四丁目の交差点近くで
汗をかきながら

増税について演説している男がいた
私はその男のことを知らないけれど

なんだか話を聞きたくなかったので
手近な道を曲がって

裏通りを歩くことにした
ところがそこには

待ち伏せのように演説している
日焼け止めか白粉で輪郭のかすんだ

女がいて

待ち伏せのように演説している
日焼け止めか白粉で輪郭のかすんだ

女を途惑わせる

地球温暖化のことでも
文明を呪つても

人間の数が多くすぎるのは間違いない
銀座だしね

気分的にはいろいろなものを呪いたくなつても
仕方がないとは思うんだ

華やいだ空気が気に障るものも
エコロジーの人としては当然だし

でも大きな声で演説しているのを聞いていると
とくに環境に配慮しているとも思えない

独りよがりな感じがして

また道を曲がりたくなつてしまつた
この先の

煉瓦亭の前に並んでいる人は
メンチカツなんかを食べるわけだし

ライオンでもツバメでも
ビヤホールではソーセージだしハンバーグだし

話題は地球温暖化だし

耳の奥がざわざわいいだして
平衡を保つのが難しくなりだす

私はといえば

伊東に移り住んでからは
朝も晩も魚で

東京に出ている今夜はカロリー制限を解除して
天麩羅かトンカツでも食べようかと思つたりして

ふらふらと歩いていたのだけれど

またどこから演説の声が聞こえてきて
眩暈はひどくなるばかりだ

静かに生きるためにには
しかたない

東京駅まで歩いて
夕食に間に合うように

新幹線で帰ろう

季節渡り

花の季節を渡つて
もう自分の名前さえ忘れた
老人が歩いてくる

なにか思い残したことでもあるのか
旅を止めることが
出来なくなつてしまつたらしい

風の季節に散り敷く花を見て
ときおり笑顔になる
昔はあつた楽しみのかけらに

触れるものがあるのか
出来なくなつてしまつたらしい

次第に日差しの強くなる
紫陽花の街道を歩きすぎて
とぼとぼした老人がまた
季節渡りを始めた

風渡りの老人が
港の辺りで
立ち止まつた

大きな音で鼻をかみ
漁師を驚かせたけれど
気にしていない

風渡り

風渡りの老人が
港の辺りで
立ち止まつた

大きな音で鼻をかみ
漁師を驚かせたけれど
気にしていない

風の音につられて
鯨が跳ねる

これも
老人の意志ではない

なにが切つ掛けか
夕暮れが終わりになると
闇が来る前に

風にのつて行つてしまつた

こんな日だ

君

雲が雨になつて溶けだす
それでも海面から水分の補給を受け

雲はふくらみ続けて
空を埋め尽くしていく

太陽の気配は遠く
時計を見ない限り

夕暮れなのが
昼なのか分からぬほど

光りが弱々しい
弱々しく微笑みながら

雨に溶けていつてしまつた君を
思い出すのは

こんな日だ

俳句のある詩・4 ボールの行方

夏草やベースボールの人遠し——正岡子規

夏草の生い茂る原っぱを通りかかると
野球の試合をしていた

白球が飛んできて
大きくはずむと

ころころころがつて
草むらの闇の奥に

消えた

そして
ボールを追つてきた少年が

いくら探しても見つからなかつた
もう帰ればいいのに

とわたしはつぶやいた

夕方

原っぱを通りかかると

少年はまだボールを探していたのだ

ここにいる理由

ここにいる理由が
見つからない

夜な夜な

アパートメントの部屋をぬけ出して
終夜営業のハンバーガーショップの
つめたくなつたコーヒーのカップを前に

ぼんやりしている理由が
見つからないのだ

いつごろからだろうか
どこにいても

居心地がわるくて
どこかへいきたくなつた

わたしは思つたものだ
わたしの居場所はここではない
どこかほかの場所なのだと
だから

ここにいる理由が
見つからないのだと
でも同時に

わたしは思つていたのだ
ここ以外に
わたしの居場所はないのだと
そもそも最初からないと
つまり

ここにいること以外
ここにいる理由が見つからないからこそ
わたしはここにいるのだと

鳥の巣に関する四つの断片

わたしたちは夜雨戸を開けたまま寝た
母が禁じたのだ

戸袋の鳥たちが巣立つまでは
雨戸の開閉を

高校生のわたしは〈鳥の巣〉と呼ばれていた
いつも頭に鳥の巣を乗せて歩いていたので

わたしはある秋とつぜん鳥の巣に出会つた
異国の町で。
町の木々がすっかり葉を落としたあと
無数の鳥の巣が現われたのだ
魔法のように。

わたしは動搖してしまつた

鳥の巣は鳥の巣にすぎないのに
生涯でもつとも嫌だつたのは
ビルの通気孔をひとつひとつ調べて歩いて
鳩の巣を見つけ出して
破壊する仕事だつた
とりわけ巣のなかに空色の卵を見つけた日は
いちにち気が晴れなかつた
ただちに叩きつぶさねばならなかつたので

